



図2 同（側面）



図1 高取の猿石



図3 橋の亀石

〔小川論文参照〕



図5 石神出土の山形石



図4 橘寺の二面石



図7 同（背面）



図6 石神出土の石人

猿石の周辺 (二)

——明日香研究ノートから——

小 川 光 暘

二、高取の猿石

平田の猿石（世にいう欽明陵古墳の猿石）とは一体何なのか、この謎を追いもとめるためにも、類似の石造遺物である高取の猿石・橋の亀石・橋寺の二面石・石神出土の石人^{いしがた}と山形石について考えてみる必要がある。そこで便宜上ここではまず高取の猿石を組上にあげることしよう。

^{図1・2} 高取の猿石があるのは高取山の中腹。地図の上に所在を記すと頂上（海拔五八四メートル）から北西約七〇〇メートル（海拔四五〇メートル）の地点である。といっただけでは状況の説明は不十分だから、高取の町から猿石のある位置への行程を簡単に描写してかかるところにしよう。

近鉄吉野線の壺坂山駅で下車すると、鄙びた高取町の中心街が目前に展開する。この町の日抜き通りは、高取山から流れ出た高取川の溪流添いに走っているから、川の上流をもとめるように通りを上の手に進めることにする。約一

猿石の周辺 (二)

キロメートルで高取の町を抜け、さらに約一キロメートルで人里から離れ、いよいよ山道に入る。そこからまた約一キロメートル進むと「史跡高取城跡」の石碑を境界に道の両側に高取城の石塁がつぎつぎに展開する。石塁の間を蛇行する坂道「七回り」をすぎると景観が開け、遠くに二上山、中景に畝傍山、そして眼下に檜隈里ひのくまが見える。さらに胸突く急坂「一升坂」を登りつめると金剛・葛城の連山が二上山の左手に雄大な姿を見せる。そして道は頂上（高取城主跡）を目指す上り坂と、左方へ関口門跡から栢森かやのへ抜ける平坦な小道との三叉路にさしかかる。この分岐点に「高取の猿石」がボツンとうずくまっているのである。

像高は七四センチメートル、大きさや形姿から、一見したところニホンザルが蹲っているような印象を受ける。同じ猿石の俗称をあたえられてはいても、平田のものは動物園で見かける大型の猿類を思わせるが、これはこの辺りの山野に棲息している普通のサルに近い。その点だけをとりあげると、たしかに写実的で、それだけ空想的な面白味に欠ける点はいなめない。保田与重郎さんの書かれた「檜隈墓の猿石と益田の岩船」⁽¹⁾は、猿石を論じたほとんど唯一のエッセイだが、この文中でも、平田の猿石には「奇怪な創造力」についての詳しい論議が費され、そのあとこの猿石にもふれてはおられるものの、「今高取町にあるのは、池田から運んだと言っているが、どうであろうか、形がわるい。」とただ一言の批評があるのみだ。

「池田から運んだ」とは、地元のいい伝えで、高取の猿石はもと池田（平田村字池田）から掘り出された平田の猿石群の一つであったのだが、高取城の築城の際、運悪く運び去られたものとするのを指しておられる。保田氏はこの伝えを否定して、出来ばえからみてもともと別のものと主張されているわけだ。だが、できればの点は別に論じるとして、もう少し猿石の形式をみておくと、

一、花崗岩の自然石に加工をほどこした造形であること。

二、平面的な造形性を守っており、背面にある意味不明の彫刻は正面と別個の意味をもっているとみられること。

三、顔面が体に比して大きく、腕は体に密着し、手は指をひらいて胴部を押えた形に作っていること。

四、肩に頭部が直結する極端な猪首いぐさであること。

五、彫りが大まかで、細部にこだわらない大様な仕上げであること。

六、陰部を露出した裸形の姿であること。

以上の六点では、平田の猿石群とはほとんど様式的に一致していることがわかる。このようにみえてみると、高取の猿石が池田から掘り出されたものの一味であったか否かは別としても、少なくとも様式上は同類のものであることは承認されるであろう。ここではこの点のみを確認するにとどめて、つぎに目を明日香村橋にある亀石の方に転じてみよう。

三、橋の亀石

亀石〔図3〕は橋寺の西方約五〇〇メートル、今は鄙びた野道と化しているが、かつては飛鳥の西玄関から橋寺へ参詣する本街道たちばなどう道ミチの道わきに大きく立ちはだかっている。地図の上にこの位置を記してみると、それはまた、高取山の裾野が舌状に伸びて広い台地を形成し、それがまさに途切れようとする最南端にあたっている。

高さ二メートル、幅三メートル、奥行四メートルの巨大な花崗岩の自然石で、正面の部分に眉と目と、そして突出した鼻頭のような形を刻み、饅頭形をした自然石のスソの部分に波状の曲線を入れて下部をわずかにけずっている。

猿石の周辺 (一)

猿石の周辺 (二)

亀石とよばれるのは、この巨岩の自然の形と、それにほど似たわずかな裾部の加工とによって、全体があたかも亀の甲のような印象をあたえることによるものであろう。文化十一年の『以文会筆記』⁽²⁾には、

「橘寺より平田へ至る道四五町許の街道に亀石と云ふあり、大石にして形亀に似たるを以て名づく。然れども亀にあらず、頭とおぼしき所に面貌ありて半ば土に埋まる。全く平田の山王と同石像なり。……」

と、亀石への疑念を唱えている。形は亀に似ているが、頭部がまるで人間の面貌のように作られていることへの素朴な疑念であるが、さりとて、他に何と解してよいか見当がつかねるといったところであらう。(ついでながら亀石が「平田の山王」つまり平田の猿石と同じであるとの見解は、おそらく双方の形式についてのべたものであろうが、この点は後述する如く筆者も同じ意見である。猿石との比較の上で参照に値する見解であることを附記しておく。)

亀石に関して書かれた比較的最近の文献にも、これを亀とみるよりはむしろ蟾蜍^{せんじゆ}(ひきがえる)とみる見解をのべるものもある。これも一考の価値があると思うがそれについては後にふれることにし、今は旧来の通説にしたがいこれを亀の造形とみて話をすすめていくことにする。

さて、亀石はさきに記したように、平坦な台地にただひとつ小山のようにうづくまっているわけだが、附近の地形や地質の状況からみて、もともとこの辺りに大きな石塊がごろごろあったようにには思えない。とすると、この石はどこか他の場所からわざわざ運んできたことになる。近くにある石舞台の巨石を動かした技術や労働力がここでも発揮されたことが思われるが、それにしても推定四〇トンといわれる巨石を動かすこと自体は大変な事業であつたはずである。にもかかわらず亀石について記された古い記録は何一つ残されていない、土地のいいつたえに、「この石はも

と東を向いていたものが次第に旋回して現状（西南を向く）のようになった。これが更に旋回して真西を向く時には大和一円が水びたしになる。」とされるがはたして何時頃から、どうした理由でいい出されたものか見当がつかない。はつきりいつて、この亀石が何時、どうして作られ、また何故ここに据えられたかはまったく推測のほかはない。

しかも推測の手がかりもほとんど無に近いのである。ただいいうることは、

一、この亀石もまた花崗岩の自然石に加工をほどこしたものであること。

二、彫りが大まかで、おおらかに造形されていること。

この二点において、さきにみてきた猿石と共通の世界に生きているといえる。また、さきのべたように、これだけの巨石を運ぶ事業はよほど特別の動機がないかぎり安易には行ないえない。そして、ここ明日香の地で巨石の運搬が断続的ながらも行なわれていた期間は、およそ飛鳥・白鳳の時代に限られるといつてよい。これらの条件を手がかりに考えると、少くとも製作の時期は飛鳥・白鳳時代に限定してかかつていいように思われる。

しかし、では何故このような造形がなされたのか、亀石が、古墳の所在地からも遠く、寺院趾とも直接結びつけない位置に孤立して存在するだけに、その意味の解釈には、まるで雲をつかむようなむづかしさがある。

四、橘寺の二面石

亀石の東方五〇〇メートルには橘寺の伽藍がある。現在の諸堂は江戸時代の建築だが、昭和二十八年の発掘調査の結果、ほぼ現在の寺地と同じ所に東面する四天王寺式の伽藍があったことが判明し、文献によって知りうる天武九年以前の創建が裏付けられた。一面石は現在の太子堂の南側にあるが、この位置は創建時の講堂址にあたる、尚い

猿石の周辺 (一)

ば、講堂最前列の礎石の線上に位置しているわけだが、もとより現在の立地点に深くこだわる必要はない。というのも、この石像もまた一度は土中に没していたものを掘り出し、位置の移動があったことが明らかだからである。

先きにも引用するところのあった『以文会筆記』⁽³⁾に、

「去年、橘寺の側より一軀を掘出して今橘寺にあり。土人之を地主の神像なりと云ふ。一軀両面、一面は中年位の面貌、背面は猿の面に似たり。」

と明記しているから、文化十年に橘寺の近辺から掘出し、安置の場所をもとめて現在地に持ち込んだものであろう。

二面石は高さ一〇六センチメートル。柱状の自然石の両面に人顔らしい彫刻をほどこしている。石材は花崗岩で、自然石に加工をほどこす点、さらに彫りが大まかである点は猿石や亀石と同様の手法といえる。だが、この石像には猿石や亀石のような大らかさ、明るさがない。また顔面のみを彫刻して他を全く省略している点もこの像を稚拙な面白さから遠いものになっている。さらにいうならば、顔面の表情も内省的で陰翳を伴っている。寺ではこの石像を善悪両相、二業一心をあらわすというように仏教的に意義づけて説明しているが、そうした解釈を受け入れる条件が二面石にあることは事実であろう。こうした様式上の観点を勘案してみると、二面石を猿石や亀石と同列に論じることが正當でないように思われる。

広い意味では猿石や亀石の伝流をふまえた石像であることに相違ないが、製作の時代や動機の間では、いささか違った条件を考える方が妥当ではないだろうか。

五、石神いしがらみの石人と山形石

明日香にある石彫遺物の中で、年代や内容の考証に役立つ傍証が比較的豊かに見出しうるものは、明日香村石神いしがらみ出土の石人と山形石である。

これらの遺物は明治三十五年に偶然発掘されたものだが、同三十七年に東京博物館に移され、現在も館内の庭に立て並べてある。一般には道祖神石と須弥山石の名で呼ばれているが、名称に問題があるので石人と山形石と仮りに呼んでおくことにする。

(図6・7)
石人は像高一七五センチメートル、一個の花崗岩から彫出した人物像だが、やや前かがみの姿勢で直立する（ないしは直立に近い姿で前かがみに腰かけているとも見てとれる）。男性の背後から、女性が抱きついているという。まことに奇異な複数人物像である。男女抱合というとか何か艶めいた感じがするが、この像は男女双方とも顔に深い皺を寄せ年老いた夫婦を思わせる。男女とも衣服を身にまとい、男性は頭巾をかぶっている。さらに、二人の口の部分から孔が穿たれていて、体内を貫いて脚部に抜けていることも考慮に入れておかねばならない。

(図5)
山形石は花崗岩の石塊を三段に積み上げた総高三三六センチメートルの石造物。三段の石はいずれも不整形ながら、下の二段は円筒状、最上のは円錐状を呈している。そして三段のほぼ全面に山岳と人物や動物らしい形態を浮彫に描いている。さらに、内部は中空に作られていて、ここに水をそそぐと最下段に穿たれた三方に抜ける小孔から水が噴き出すように工夫されている。

石人・山形石ともに、その形態のみならず内部の構造もまた奇抜なものであるため、発見と同時に種々の論議をよ

猿石の周辺 (一)

んだが、決定的な解釈は得られなかった。そこで昭和十年に至って石田茂作・矢島恭介両氏の手で遺構の発掘調査が行なわれた。その結果、石人と山形石をとり囲むように、石を壘んで入念に構築した曲水らしき施設が発見され、石人と山形石は、そうした庭園の一種装飾的な施設として作られたことが確かめられるにいたったのであった。

さらにまた、この遺跡は斉明紀のつぎの記事と関連することも注目される。

(一)、三年の秋七月の丁亥の朔巳丑に、靺鞨遼国の男二人、女四人、築紫に漂ひ泊れり。(中略)乃ち驛を以て召す。

辛丑に、須弥山の像を飛鳥寺の西に作る。且、盃蘭盆会を設く。暮に靺鞨遼人に饗たまふ。

(二)、(五年三月の条) 甲午に、甘櫛丘の東の川上(川上、此をば箇播羅という)に須弥山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

(三)、(六年三月の条) 石上の池の辺に須弥山を作る。高さ廟塔の如し。以て肅慎四十七人に饗たまふ。

まず、右の記事のうち、須弥山を造った位置が、(一)では「飛鳥寺の西」、(二)では「甘櫛丘の東の川上」とあるが、遺跡は飛鳥寺の西北で、甘櫛丘の東を流れる飛鳥川の東岸とは近距離にあたる。(三)に石上とあるのは一般にいそのかみと解しているが、これをいしがみと読むならば石神、即ち遺跡の現地の字名に一致することになる。(石上＝石神と解すると、斉明二年に、天皇が、香具山の西から石上の山にいたる溝渠を穿ち二百隻の船に石上の石を載んで、「流のままに」引いて岡本の宮の東の山に石垣を作ったという記事が現実性を帯びてくる。こうした理由もあって、私は斉明紀の石上は即ち石神と同じ地名と解している。)

以上、斉明紀に須弥山を作る記事のさし示す地点が、石人や山形石の出土した場所とほぼ合致する点を説明したわけであるが、だからといって、斉明紀に記される須弥山が即ち石神出土の山形石に外ならないとする通説には疑問が

ないわけではない。なぜなれば、斉明紀には三年、五年、六年の条にいずれもその時に須弥山を作ったとあるから、これに従うと須弥山は少なくとも三回作られたことになる。また、斉明六年条の須弥山は「高さ廟塔の如し」とあるから、これはよほど大きなものであったと考えるのが順当であろう。また、それらの記事のいずれにも須弥山の像を石で作ったとは記されていないのもいささか心許ないといえる。

だが、私は、斉明紀に須弥山を作った動機がいずれも遠来の賓客を饗応するためであったことを考えると、発掘された石人、山形石をとりまく曲水の宴の舞台装置ときわめて関連の深いものがあるうし、さらに、これは結論にかかわることではあるが、斉明紀は元年に「空中を竜に乗れる者有り。」というエピソードではじまっており、同天皇の二年には多武峰に天宮と名付けるあまつみや観たかみね(道観)を建てると記すなど。神仙思想への傾斜が強く感じられるが、山形石や石人にも同様な思想の背景が推考される。そうした理由もあって、斉明紀の三年(六五七)、五年(六五九)および六年(六六〇)に記される須弥山を、石神発掘の山形石にみだててもよいのではないかと考えている。

戴田嘉一郎氏はかつて、斉明紀の須弥山を造る記載は、一度あった出来事を繰返し挿入したものと推定されたことがあったが、⁽ⁿ⁾そうした考えも成り立ちうるであろう。だが私は、上記斉明紀のどの年のものが、石神発掘の石像に該当するかという厳密な意味においてはなく、斉明朝に曲水宴の施設が造園され、庭中の景物として石人や山形石が設置された。そして石神出土の遺構や遺物は正にその当時のものであると解したいのである。

このように理解してくると、つぎに山形石を「須弥山」と記した書紀の表現がいささか気にかかってくる。だがこの点についても、さきにこの遺構の発掘者として名をあげた矢島恭介氏が、『日本書紀通証』の所説を引用しつつ、これを厳密に仏教思想にもとづく須弥山と解せず「重疊たる山岳の貌のものを通称したもの」「更にもっと広く造園

猿石の周辺 (一)

や遊宴場の中に造った山岳の形を指し」また「同時にその施設全般の呼び名とした。」⁽⁸⁾と解しておられる点に賛意を表したい。つまり書紀に須弥山を作って賓客を饗応したとあるのは、単に山形石を製作したという意味ではなくて、曲水の施設そのものを作ったことを伝えているとみるのである。私はさらにもう一步、山形石と石人の噴水装置は送水管や石の継ぎ目を粘土や漆喰でとめる必要があり、恐らくは恒常的な使用に耐えるものではなかったと考えている。してみると賓客を饗応するたび毎に、噴水装置をやり直す必要があり、それを端的に「須弥山を作る」と記したものと解している。このように理解してはじめて書紀の文意も納得できるわけである。

この推定が的をはずれたものでないとする、現在東京国立博物館の庭に景物のごとく配置されてある石人と山形石が、類例の少い白鳳期の石造遺物の一つであり、しかも年代その他について比較的たしかな文献的背景をもつ貴重な史料であるということになる。と同時に、とかく仏教文化の興隆が注目される飛鳥、白鳳の時代に、およそ仏教とは関連づけにくい風俗や施設が存在したことの意義が新たなる疑念としてつきまとってくる。

猿石とは何なのか、という疑念を追って、石神^{いしがみ}の石人と山形石まで同類の遺物をしらべてきたわけだが、この石人と山形石の形式は猿石や亀石とどのような関係にあるかを最後にみておきたい。

結論的というと、この遺物もまた形式上の類同性をはっきりと示している。それは、石人についていうならば、

(一) 花崗岩の自然石に加工する基本的な方法に則っていること。

(二) 一見立体的な造形のようにみえるが、基調は有機的というよりはむしろ逐字的・平面的な視覚性に支えられていること。(有機的でないからこそ、男女のとりくみが一向リアルに感じられず、むしろ稚拙な滋味をたたえる結果となっている)

(三) 顔面が通常の比例より大きく、また、女性の手は指をひらいて、老人の二の腕を押えた形に作られていること。

(四) 肩に頭部が直結する極端な猪首であること。

(五) 彫りが大まかで、細部にこだわらない大様な仕上げであること。

以上の五点を、さきに「高取の猿石」について指摘した形式と対比してみると、双方の形式が甚だ近いものであることがわかる。これは山形石についてもいいうことで、三段の石がそれぞれ不整形な円錐であることは、一つには自然石を応用する手法によるものであるし、また山形石の表面に描かれている浮彫も平面的な形式を基調にしていることが明瞭である。

こうしたわけで、石神の石造遺物とまた、猿石とは風俗の上で（猿石は裸形であるのに、こちらは衣服をまとっているなど）相違するところがあり、また石材の自然形に順応する度合にも相違があつて、こちらの方が人工の度合を強めている点でいく分進歩した形式とみてとれるが、広い意味では、やはり同類の形式、手法を守っているといつてよい。こうした点でこれらの遺物は猿石の謎を問う有力な傍証資料となりうることは明らかであろう。

六、形式年代と実年代

猿石の謎を追つて、平田の猿石から、高取の猿石・橘の亀石・橘寺の二面石そして石神出土の石人と山形石、と、明日香にのこる石彫を一通り尋ねてきた。その結果、平田の猿石・高取の猿石・橘の亀石は形式上極めて類同性が高く、橘寺の二面石はやや異質、そして石神出土の石人と山形石は形式上同類ではあるが造形的に進んだ点がみられる。つまり形式年代の上で時代的に新しいことが明らかになったと思う。

猿石の周辺 (二)

猿石と石人の間にみられる形式年代の差異を具体的にどう位置づけるかはむづかしい問題だが、平田の猿石と石神いしがみの石人とを対比してみると、さきに一般論としてのべたほかにも年代の差を感じさせる要素がある。たとえば、双方の顔面（殊に頬）や腕・手などの肉付を比較すると、前者の方がより平面的で、後者の方には写実的な肉付へ一歩前進していることがみてとれる。又、頭部と身体との大きさのバランスが前者はひどくアンバランスで、後者は幾分均衡に近づいている。（前者は約三等身、後者は約四等身）さらに、前者における強烈な原始的怪異性が後退して、後者では単なる奇抜な風俗という程度に落着いていること。などがあげられよう。

この形式上のひらきをどう受けとめるかはむづかしい問題だが、平田の猿石が双円墳としての梅山古墳の成立年代とおそらくは同一のものであろうから、さきにも指摘したように、それがもし蘇我蝦夷・入鹿父子の「雙墓」なるとのかみであるとすれば、その年代は飛鳥末期（皇極元年Ⅱ六四二年頃）、後者は日本書紀の記載によって白鳳初期（斉明三年Ⅱ六五七年Ⅱ六六〇年）ということになって、一応合理的な解釈が成立することになる。

平田の猿石については、梅山古墳の年代についての考古学上の所見が明らかにならないと、成立年代の断定は危険を伴うから、この際はあくまでも仮説にとどめておくほかはないが、猿石を飛鳥時代、石人・山形石を白鳳時代とする形式上の時代観は、飛鳥・白鳳時代の一般的な形式年代にもあてはめることができる。彫塑史における飛鳥・白鳳時代の形式発展の一般的な方則については、すでに論述したものがあから、詳しくはその方にゆずるとして、ごく大ざっぱにいうと、飛鳥から天平への彫塑史の発展は逐字的から有機的へ、平面的（二次元的）から立体的（三次元的）へ、絵画的から彫塑的へという方向を示しており、白鳳は正にその中間にあつて飛鳥から天平への発展方向を一つの中間的段階としてさし示している。これは主として埴輪や仏像彫刻を基礎にした形式発展の一般的なパターン

であるけれども、平田の猿石から石神の石人・山形石との関係にもあてはめることができる。

(昭和四六・八・二六稿) 未完

(註)

- (1) 『大和文華』(昭和二十八年三月) 所収。
- (2) 『以文会筆記』第十一冊。
- (3) 小野勝年氏『石造美術』(至文堂『日本の美術』2)
- (4) 石田茂作氏『橘寺・定林寺の発掘』(『飛鳥』近畿日本叢書第三冊)
- (5) 『以文会筆記』第十一冊
- (6) 矢島恭介氏『飛鳥の須弥山と石彫人物について』(『国華』第五八編十二冊)
- (7) 同氏『推古天皇廿年紀造須弥山記考』(上)(『史迹と美術』一六三号)
- (8) 同氏 上掲論文
- (9) 梅山古墳の年代について論述された文献はないが、森浩一氏は、梅山古墳の周辺にある古墳群の年代と状況から判断して、飛鳥・白鳳時代の築造であることには間違いないと推断されていることを記しておく。(同氏との談話による)
- (10) 拙著『日本彫塑史の時代区分』(『文化史研究』第十七号)、『アジアの彫刻』読売新聞社刊、参照。

追記

前稿(猿石の周辺(一))を書くにあたって、平田の猿石四驅の実地調査を宮内庁に依頼したが、陵墓の柵内は禁足地であるため許可を得ることができなかった。しかしせめて、石像の明確な写真と正確な測定結果だけでも入手したいと思って、その旨を申しそえておいたところ、本稿脱稿の直後、宮内庁書陵部陵墓課より記録写真の頒布を受けることができた。前号に掲載した写真は筆者が柵外から写したものが、頒布してもらったものは記録的に撮影したもの

猿石の周辺 (二)

であるから、研究上利用価値が高く貴重な資料を得たことになる。さらにその後、同じく宮内庁書陵部の畝傍監区事務所から、石像の比較的詳細な実測図の送付をうけた。略式の測量ながらも、おそらくは正式な実測としては最初の試みであろう。この実測図によると、前稿で仮称したA B C D四軀の像高は、A ∷ ∘、七一メートル、B ∷ ∘、八五メートル、C ∷ 一、〇二メートル、D ∷ ∘、八五メートルとなる。像高とはいっても、図面より判断するといずれも地上高というべきであろう。これらの像は終戦直後、占領軍による損壊をおそれて土中に埋められたそうだが、現状で見ると完全に掘り出したものとも思えない。地下にどの程度埋没しているのか、側面や背面の状態はどうなのか、など、研究者としてまだまだ知りたい箇所は多くのこっているわけだが、もっとも基本的な資料を入手しえたことは無上の喜びである。

このたびの研究にあたり多くの方々にお世話を掛けてきたが、とりわけ宮内庁京都事務所の中島宝城氏、同じく畝傍監区事務所長の吉田敏夫氏ほか宮内庁の関係者御一同と、同僚の森浩一氏には特別の御骨折と御助言をいただいた。ここに記して謝意を表したいと思う。